

第11回 Share Book vol.7

木 藤 茂 先生推薦！

リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー（永井清彦訳）

『新版 荒れ野の40年——ヴァイツゼッカーダント領ドイツ終戦40周年記念演説』

目次

1. はじめに

きふじ しげる

2. インタビュー（木 藤 茂 先生）

① 本書（ドイツ終戦40周年記念演説）について

② コトバとじっくりと向き合うことについて

聞き手：佐藤 剛（国際関係法学科4年）、写真：齋藤 浩希（国際関係法学科3年）

3. ブックレビュー 『新版 荒れ野の40年——ヴァイツゼッカーダント領ドイツ終戦40周年記念演説』

4. 編集後記

5. 「Share Book」バックナンバー

はじめに

「獨大生に読んでほしい一冊」を先生に紹介していただくShare Book、今回の推薦者は、法学部総合政策学科の木 藤 茂 先生です。

今回の主題は「コトバとじっくり向き合う」、この一言に尽きます。コトバとじっくり向き合うべきか否かと問われたとき、多くのひとはおそらく向き合わないより、向き合ったほうがいいのでは、と思うのではないかでしょうか。これがこの記事の結論です。「コトバとじっくり向き合うべきだ」で済むなら、インタビューは数分もかかりません。しかし、インタビューは90分を超える。どのようにしてその結論に至ったのか、そのプロセスをぜひ皆さんに辿っていただきたいと思います。

木藤 茂 先生 推薦の1冊

『新版 荒れ野の40年——ヴァイツゼッカーダント領ドイツ終戦40周年記念演説』

(岩波ブックレット767/岩波書店、2009年)

インタビュー 木藤 茂 先生

① 本書（ドイツ終戦40周年記念演説）について

Q. 本書の内容について教えてください。

この本は、ドイツが終戦を迎えた40年後の1985年5月8日に旧西ドイツ第6代連邦大統領のリヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー氏が連邦議会で行った演説の全文和訳です。この演説はとても有名なものなので、ドイツ語学科の学生はもちろん、既に目にしたことがある方も少なくないと思います。

—この連邦大統領という役職には、政治的な権限やパワーはあまりない、と聞きましたが？

そうですね。戦前のワーマル共和国の時代にも大統領という職はありましたが、その当時の大統領はかなり強い権限を持っていました。ご存知のことおり、ある意味ではそれが裏目に出る形で、ヒトラーが「合法的に」権力を取ってしまう、という構造を作り出してしまいました。その反省もあって、戦後の西ドイツの連邦大統領は、ドイツという国の元首として言わば象徴的な存在といった位置付けとされています。

Q. この演説が行われた当時は、どのような時代でしたか？

ヨーロッパに関して言えば、戦後40年が経ち、1982年には後のドイツ統一時の首相となったコール、84年にヴァイツゼッカー、85年にソ連のゴルバチョフがそれぞれ選ばれ、ちょうど世代が変わった時期でした。ソ連の側の代表にゴルバチョフというかなり進歩的な人物が就任したということは、この演説と無関係ではないでしょう。



—東西冷戦の当時、ベルリンの壁が崩壊する、冷戦が終わる、といった雰囲気はあったのでしょうか？

ほとんどなかったのではないかと思います。この演説が行われた後ですら、ほとんどの人は、5年後のドイツ統一を予想してはいなかつたと思います。その意味では、急に冷戦が終わったという印象もありますが、一方で、そうした大きな変化の下地や土台はあったのではないかと思います。

Q. この演説は、そのような時代において、どのような意味、影響があったのですか？

演説の中でも出てくる「40年」という節目をどう考えるかというときに、当時のジャーナリストの人たちの中には、50年や100年とは違って節目としてはあまり大きなものではないのではないか、という意見もありました。また、東西ドイツに分裂して統一というものを予想できない状況の中で、敗戦を意味する5月8日を思い出すこと自体に飽き飽きして、40年だからといってわざわざことさらに思い出さなくともいいのではないか、といった人たちもいました。

しかし、ヴァイツゼッckerはそのような姿勢に対して警鐘を鳴らしました。戦争を経験していない世代が増えしていく中で、40年というのは50年や100年に比べれば大した節目ではないように見えるかもしれません。ですが、そのようにして過去がだんだん薄れていってしまうことが一番良くないという思いから、40年という一見すると中途半端にも見えるタイミングでこの演説を行ったのではないかと思います。

Q. ヴァイツゼッckerがこの演説に込めた思いはどのようなものですか？

5月8日をあまり思い出さないドイツ人も多い中で、「忘れてしまうと未来はない。きちんと心に刻んでいることで初めて未来につながっていく」ということも伝えたかったんだと思います。無関心であってはいけない、主観的に考える、ということでしょうか。今、主観的というとネガティブに聞こえるかもしれません、そういう趣旨ではなくて、自分のこととして、理解する、実感する、というメッセージなのではないかと思います。

Q. 木藤先生ご自身が、この演説を読んだのはいつでしたか？

実際にこの演説を読んだのは大学1年生のときでした。演説のドイツ語の原文¹が第二外国語の教材として使われていたので、独和辞書を繰り返し引いて、何とか理解したのを覚えています。その後かなり経ってから『岩波ブックレット』から全文訳が出版されていたのを知りました。

カセットテープでヴァイツゼッckerの生の声を聞きましが、当時はドイツ語を生で聞いたこともなかったので、この演説を「読んだ」というよりはむしろ「聴いた」という印象の方が先にあります。ですので、内容そのものよりも、まずはドイツ語の響きや美しさが印象に残っています。文字だと分からぬ部分もありますよね。

¹ [編集部注] Richard von Weizsäcker, 40. Jahrestag der Beendigung des Zweiten Weltkrieges, Verlag HAKUSUISHA, 1986. 同書は、浜川祥枝編『反省と希望』という日本語のタイトルとともに白水社から公刊されています。

Q. なぜ本書を推薦しようと思ったのですか？

学生時代に読んだ本の中で、内容もさることながら、むしろそれ以上に、言語としてのドイツ語の響き、論理性、説得力、さらにはコトバの力のようなものがとても強く印象に残っていたので、推薦しようと思いました。要するに、コトバとじっくりと向き合うということを考えたときに、本書は良い教材、題材ではないかと思ったからです。

② コトバとじっくりと向き合うことについて

Q. コトバとじっくりと向き合うことを学生に意識してほしいという理由から本書を選ばれたとのことです、コトバとじっくり向き合うとはどのようなことですか？

1つの事柄をコトバにして相手に伝えるときでも色々な表現の仕方があります。その中で「なぜこういう表現、単語を使ったのか?」ということを考えることが、コトバとじっくりと向き合うということではないかと思います。つまり、ある人が考えたプロセスや思索の跡を追体験する、追いかけるということでしょうか。ある人が書いた文章の背景や状況、メッセージを100%理解するのは無理ですが、それをできるだけやってみる。それが向き合う、追体験するということだと思います。

Q. コトバと向き合う必要はあるのでしょうか?

昔の人や偉人が考えたことは、今の時代では全く役に立たないのではないか、と言うと、そんなことはありません。もちろん時代は違いますが、追体験することによって色々なものの見方ができるようになります。それをやらずに自分だけのものの見方をしていると、視野が狭くなったり、誤解や曲解をしたり、我田引水をしてしまったりします。「自分とは違う人たちがどうしてそういう考え方になったのか?」ということを丁寧に追いかけてみる。そのようにじっくりとコトバに向き合う経験を積むことで、人が自分の考えをある程度しっかりと持てるようになるのではないか、と思います。

一ただ、コトバとじっくり向き合うというのは、実生活に直結して役に立つというものではない、という意見もあると思うのですが?

特に最近、「すぐに役立つことを、わかりやすく、短く教えてほしい」という人がいます。その気持ちは全く分からぬわけではありませんが、今、これだけ情報があふれている中では、そんなことは一人でもできることです。常識や知識はもとより必要ではありますが、すぐに覚えられることや一言で終わるような単なる知識だけでなく、さらにそこから知識をかみ砕いて考えることが重要です。答えがない状態で、色々な立場からじっくりと考える時間というのは社会人になるとなかなか作れないで、大学ではそういった“贅沢な”時間の使い方もせひしてほしいと思います。吸収力のある20代前半ぐらいまでにそういうことをやっておくと、将来が大分違うと思います。

Q. コトバが持つ力、魅力とは何ですか?

難しい質問ですね。私ははある論文の冒頭に書いたことがあるのですが、「文は人なり」、この一言に尽きるように思います。コトバは、結局、人そのもの、つまり「ある人がどのような視点に立って、どのような問題意識から、どのように考えているのか」を示すもの、ということです。

Q. 通信・電子機器の普及によって、かつてに比べて、現代人はコトバに触れる機会が増えたように思います。その点については、どのように考えますか?

その意味で言うと、実は私はコトバには触れなくなってしまっているんじゃないかな、と思います。つまり、確かに文字や情報には触れているとも言えますが、言ってみれば単なる記号のようなものとしか理解されなくなってしまっているのではないか、と感じています。コトバに触れていない、じっくりと向き合うことをしなくなっている、とも言えます。

大教室の講義でも折に触れて言うのですが、みなさん「覚える」という意識は高いんですが、それで終わりだと思っているよう見える人も少なくないんですよね。「理解する」ことが重要だということが分かっていない。「覚える」と「理解する」は違うと私は思っています。「理解する」とは、自分のコトバで相手に(単語ではなく)“文章”的で「説明」できることです。覚えた内容が自分のモノにならないと「説明」はできません。分かっていないわけではないのですが、分かっている部分があるのに相手に分かっていると思わせられない。それが非常にもったいないないように思えます。このことは、外国語はもとより、むしろ母国語としての日本語について特に言えます。こういった意味では、実は法学の授業の中や教科書を読むときにも、コトバと向き合うということは十分にできるのです。

一コトバとじっくり向き合う面白さを一度でも経験した人は、そのあとも追求することができると思います。ただ、そこに気付くことができないと、大学での勉強の面白さがわからないまま卒業してしまうと思います。

高校までは覚えることで精一杯になってしまうのもやむを得ないと思いますが、大学というところは、心掛け次第でコトバとじっくり向き合うことができる場所だと思います。社会人になってから気付く人もいますが、どうせなら早いうちからそういう意識を持ってほしい、というメッセージを私たち教員は私たちなりに出しているつもりですが(笑)。

Q. 最後に獨大生に向けてメッセージをお願いします。

みなさんお忙しいとは思いますが、後から振り返ると学生時代の時間は非常に貴重です。みなさん文系ならば、ぜひコトバに向き合う時間を作っていただきたいと思います。相手の立場から物事を見たり、他の人の考え方を追いかけることで、最終的には自分の視野が広がります。そういう意味で、みなさんにはぜひコトバを“切り札”にしてもらいたいです。

(佐藤)

ブックレビュー 『新版 荒れ野の40年——ヴァイツゼッカー大統領ドイツ終戦40周年記念演説』 —推薦書を記者が読み、レビューを書きました

「真実と向き合う姿勢」

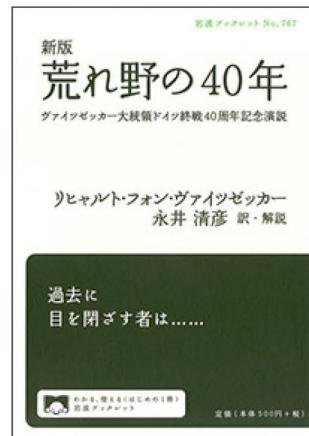
ベルリンの壁の崩壊の4年前、1985年5月8日、ドイツ連邦共和国第6代大統領、リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカーはゆっくりと、おだやかな口調で演説を始めた。

当時は世界が2つのイデオロギーに分かれた冷戦の時代、第二次大戦で敗戦を迎える。東西に分断されたドイツは、まさに冷戦の縮図の1つであった。もともと1つの国民だった彼らは、ある日を境に、西ドイツ人、東ドイツ人として生きていかねばならなくなつた。ヴァイツェッカーは演説の中で、「われわれ(wir)」という主語を頻繁に用いる。東でも西でもないドイツ民族という意味を込めて、「われわれ」という言葉を使っていたように私は思う。

歴史には、大なり小なり、輝かしいものもあれば、目を背けたくなるものもある。先人が作った流れの中に私たちはいて、いずれ後人へとつなげなければならない。先人たちはどのような姿勢で過去と向き合い、私たちはどのような背中を次の世代に見せるのか?そのヒントが彼のコトバの中に隠れている。

「今日五月八日にさいし、及ぶかぎり真実を直視しようではありませんか」、演説の結びに彼はこう述べ、あの日から40年という節目に意味を与えた。

(佐藤)



編集後記

今回のインタビューを文字に起こす作業というのは、まさに木藤先生の思索の跡をたどるような心地でした。コトバとじっくり向き合うということを私なりに言い換えてみると、「結果に至る過程を味わうこと」かな、と作業をしながらふと思いました。

「結果が全て」というコトバがあります。第三者からは結果しか見えませんから、そこに焦点があたるのは仕方ありません。しかし、その結果に至る過程を一番知っているのは自分でです。良い悪い含め、その過程を誰よりも味わうことができる自分だけです。結果だけではなく、その流れも味わう懐の広さが大事だと感じました。

(佐藤)